

## 第8回杏林医学会研究奨励賞受賞に寄せて

中本 啓太郎

杏林大学医学部呼吸器内科学教室

このたびは第8回杏林医学会研究奨励賞をいただき、誠にありがとうございます。論文作成にあたり、多くのご指導を賜りました滝澤始教授、石井晴之教授、皿谷健准教授に深く御礼を申し上げます。

好酸球性多発血管炎性肉芽腫症 (eosinophilic granulomatosis with polyangiitis: EGPA) は、チャージ・ストラウス症候群 (Churg Strauss syndrome: CSS) もしくはアレルギー性肉芽腫性血管炎 (allergic granulomatous angiitis: AGA) と呼ばれていた疾患です。気管支喘息やアレルギー性鼻炎が先行し、その後に好酸球増多、血管炎症状が出現する疾患ですが、未解明の部分も多く難病に指定されています。

今回受賞させていただいた論文は、Comparison of findings on thoracic computed tomography with the severity and duration of bronchial asthma in patients with eosinophilic granulomatosis with polyangiitis. *Respir Med* 139: 101-105, 2018で、そのEGPAと気管支喘息に関する論文です。

EGPAは希少疾患のため、画像所見、特に気管支喘息との関連を報告した論文は今までほとんどありませんでした。そこで、今回の研究ではEGPAの臨床的特徴や画像所見と喘息の罹患期間や重症度との関連を明らかにすることを目的としました。

対象は2001年から2015年に当院でEGPAと診断された31例です。全例が気管支喘息を合併しており、気管支喘息の罹患期間中央値は6年でした。31例の胸部CTを解析すると、浸潤影、GGOをあわせたParenchymal opacificationが最も多く見られる所見で、気管支壁肥厚、気管支拡張をあわせたairway abnormalityがその次に多く見られる所見でした。

またEGPA患者を気管支喘息の重症群と軽症～中等症群との2群に分けて比較すると、年齢や血液検査所見は2群間で優位な差は見られませんでした。airway abnormalityの頻度は重症群で有意に高値でした (重症群81.8% vs 軽症～中等症群30.0%,  $P = 0.009$ )。

さらに気管支喘息の罹患期間を5年以上群と5年未満群との2群に分けて比較すると、年齢や血液検査所見は2群間で有意な差は見られませんでした。airway abnormalityの頻度は罹患期間5年以上の群で有意に高値でした (5年以上群66.7% vs 5年未満群10.0%,  $P = 0.006$ )。

以上の結果からこの研究は、気管支喘息の病態がEGPAの画像所見と関連性があることを示しました。胸部CTは我々呼吸器内科医にとっては非常に身近な検査ですが、その一つ一つの所見をよく見ることがいかに重要かを再認識する研究でもありました。